

岡 崎 記

岡崎記

抑、前の大相国源朝臣家康公と申奉る八、参州

岡崎の城主徳川清康の御孫、廣忠の御子也

御稚名を竹千代君と申奉る、御母は苅屋の城主水野

氏の娘ニテ水野下野守妹の御腹なり

天文十二年 癸卯 竹千代君

二歳の御時、母堂を廣忠離別し給ひてかり

屋へをくりてのち、田原の城主戸田少弼の

聲にならせ給ふ也、其頃尾州より織田弾正忠、西参河へ発向して岡崎の城に向て

諸所に取出をかまへ取つめけるゆへ、岡崎一城に
なる、依之駿河今河殿へ加勢を給ふゆへに

同十六年 丁未、竹千代君六の御歳駿河へ人質と

して御下向のところを、田原の城主戸田等

塩見坂へ出むかつて竹千代君をう八ひとり、尾州

織田弾正方へ永楽五百疋に売り奉るゆへ二

熱田名護屋に三年を送らせ給ふ也、同十八年

己酉 三月六日竹千代君八歳の御時に、御父廣

忠廿三にをくれさせ給ふ其時河野藤蔵と申もの
ありけるか、かのもの百舌或八

雀子色々の小鳥共を竹千代君へ捧けつゝ御馳走申上
たりき、其時の忠勤不浅によりて、そのゝち藤蔵

を召出され賞
禄ありと云々さる程に参州安祥の城をは

尾州の織田弾正方へ伐取て、かの城には嫡

子の織田三郎五郎信長公舎弟、後
号大隅守信廣置たまふ

所に、今河殿より駿河・遠江・東三河三ヶ国 伊賀守・松平次郎右衛門兩人也、右廣忠御死の人数を催して、かの城へ押むかハせ給ひて 去の已後、駿州より番手の衆を入、岡崎の七重・八重に取巻て責つめけるほとに 城を持せ給ひて、本主竹千代君へハわつかに父、織田弾正方より扱をいれて、其時 御扶持方計の御あてかひにて、參州の所

竹千代君と織田三郎五郎殿と人質かへに成て 務とてハ少も渡さず、今河家へ押領し給ふ

同十九年^{庚戌}竹千代君九歳の御時、駿 ゆへ、御台所つゝかす、就中竹千代君御衣服を

河へ御下向ありて、少將の宮の町に御住 も召かへさせ可給やうもなくして、中々諸

居なり、御供たる衆には石川伯耆守・天野 事御不自由千万なる次第也、されとも御

三郎兵衛・上田慶庵等也、岡崎の城代に されとも御譜代の士に清康・廣忠より、宿

は石川右近・阿部大蔵兩人、惣奉行八鳥居 老鳥居伊賀守其身有徳にありけれハ

御衣并厨料とう、ことくく、ミなこの伊賀守調
進して御忠信他に異なり、かねて岡崎の
惣奉行の事なれば、いま河家へ忍ひく
兵糧米御蔵くへつめ置て、其後岡崎へ御
馬をよせ給ひし時、君の御手を引て見せ奉り
それかし老後の役にか様の事に仕置申也、土あまた扶
持せさせ給ひて方々伐取御手をひろけ、御
名をあげさせ給ふへし、某^(すて)己に八旬に余り
露命をたもちて一度君の此城の主とならせ
たまはんを見奉る事、生前の大慶これまで也と

申て老眼より涙を流せは、君も御涙をうかへ
たまふそありかたき、各御譜代衆岡崎に残り
みて、手作をして其身妻子をやしなひて十
余年の春秋を送りけるこそ久しけれ、其内
竹千代君御元服ありて義元の元と字を請
させ給ひて次郎三郎蔵人元康と申奉る、永禄
元年^{戊午}元康十七歳の御時、大高の城へ兵糧入
を受取給ふ処に、敵の出たるに無念入させ給ひ
て、それより岡崎へ打入^(うちい)せ給ひて、暫ありて
駿府へ御帰陣也
其内岡崎にて小迫合ともあり寺
辺・梅かつほ・広瀬表の城とうなり

同三年^{庚申}元康十九の御歳に、今河殿なをさんとし給へ共、人数ちり〈なれは尾州へ発向して、大高^(防戦)ほうせん^(防戦)の取出を ついに敗軍する、義元八腹を切らんとし元康にせめさせ給ひて乗崩させ、大高の 給ふ処、毛利新助と名乗て走りかゝり城に八元康を置給ひ、鳴海・沓懸・大高の城 義元を打奉り首を取る、大将討れ給ふへも兵糧入させ、明日八清洲へうちいらんとて うへは諸軍悉敗北したり、元康八大高の五月十九日桶狭間山にて兵糧つかわせ給へは 城番手の御事なれ八各宿老衆諫め惣軍も思ひ〈所々に五十騎・百騎打寄 申八、義元御討死のよし其聞へあり、早々〈腰飯つかひ居たる処に、大風・大雨吹ふり 此城を御引取可然と申上れ八、元康曰くして前後も不見折ふしに信長千余騎ニ たとひ義元討れたまふ事必定なりとて押寄せ切てかゝり給へは、義元備をたて も其をいつれなりとも味方の内より慥なる到

来なし、さもなきに(おびえ)をひえときをつくり

札を越けるに、道にて六之介行逢たり、何者そ

城を明引退、もし義元討死いつわりにおひ

ときひしくあらためけれ八、しかくの使のよし

て八義元へ面をむけんやうなし、世の嘲後代

申により、其状をとり披見して、其者を八押

の悪名尸(屍)の上の恥辱也、いかさま慥なる一左右

返して、それより六之助八取て帰り、此旨申上る

なからん間八全く去間舗と宣ひて、浅井

なり、をのく家老衆打寄其儀なら八今

六之助と云うものを信長の陣所へ物見に

宵の内に御引取可然よし申けれ八、元康宣八

越給ふ所に、また信長の御内に梶川平七

宵の間八闇にて行先くらく前後さし引也

と申て元康へ志の者ありしか、彼者方より

かたし、今少待て月の出手より引退へし、もし

信長大高の城へ人数を押向け責給わん

其内に敵寄来ら八此城を枕として討果す

と評定あるよし注進のために、忍ひて飛

へしとて、少も騒きたまわす、何れも是非と

諫申けれ共御用ひなく、遂に月の出てより六之介に出逢て、元康にて渡らせたまハ、

引取らせ給ふ也、(まじと)寔(よ)に能しつませ給ふ大

相違なく通し申さんとて、今道迄送り奉

将やと諸人後に八思ひあたりける、さて

れ八無恙岡崎迄引入らせ給ふ也、駿州より

雑兵千余人はかりにて先後心をひとつに

の番手の衆、岡崎の城をあけて退くゆへ

して落行ける処に、落勢討留んとて苅

同年五月廿三日、(大樹寺)本寺より岡崎の城へ移り

屋より三百人はかりにて押出しまつ所へ行

入らせ給へハ、御譜代の老若不残馳集りて

かゝり、これ八いかなる勢そや、敵か味方かと

悦ふ事かきりもなし、かくて元康を改め

たかひに弓に矢をはけ、鉄砲の火縄をは

徳川参河守家康と申奉る、同四年辛酉

さ三用心する処に、苅屋衆に上田平六と

家康公廿の御歳参州の内にせり合あり、岡崎・瀬花・梅かつほ・小川・石ヶ瀬のせり合寺辺・

いふものまつさきに駈来りけるか、浅井

苅屋十八町の小セリ合長沢・とうかねとうなり両吉良の屋形を随ひたまひ

西尾・東条治る、はつ(幅豆)・片の原は小笠原新

衆には、酒井將監上野の城主也御一門には松平監物

九郎御方(味)申故、是も御手二入なり、其後信

桜井の城主也其外佐崎寺の御住・八面寺内・鷲塚

長と和睦ありて其上信長公御息女を

の寺内・針崎の寺内・渡路(土呂)の寺内、この寺々の

家康公御惣領の竹千代君と御縁辺の

檀那とも御近習・外様の者迄も其宵まで八

御約束にて、互に御加勢これありて信長

御奉公申て相詰て居けるか、明る卯の刻に八

公天下を識り給ふこと、辰より午の年迄

一里半道の処なれ八心やすく立のきて思ひ

十五ヶ年のあいた也、同六年癸亥

にはせ集る、岡崎より一里南に上和田と

家康公廿二の御年参河に向宗一揆発而

いふ村あり、此所に大久保五郎右衛門城あり、此

其元は野寺の寺中に徒党の者ありける故に岡
を、酒井雅楽頭寺中へをし込て、せんさくを遂るに依て也

一族三十六人馳集るて(マ)にて支へたり、上

崎一城にならせ給ふなり、其時御敵申たる大身

和田より渡路・針崎へはわつか二十四五間也

針崎より本多・蜂谷大将にて七八百人にて岡崎野まで追はらへは、また針崎より荒手の者へ働く処を上和田にて押へ、日々セリ合て絶間とも十騎計にて出向ふ処へ、家康公駈着せ給ふもなし、就中正月十一日二八、はけしき取合あり御馬の上にて、(みづから)自鎧を御持、御馬取も不続処へて上和田の城戸口まで敵をしつめて大久保宇津与五郎走付て御馬の口ニつく、駈入かけ五郎右衛門・同七郎右衛門兩人ともに眼を射られ廻し御下知し給ふ処へ蜂屋ついてかゝりける其外数多手負けれとも、一族あひ集りて一を、御目を見出し大音声にていからせ給へは、御人も不退してふせきたゝかふ所へ、上和田と岡崎諸代の者のやさしきは、御声に驚き恐れての間にもつなと云所より土屋甚内・筒井甚六(すけ)日来は一騎当千の勇者なれとも、鎧を引を先として十騎計諸鎧を合て駈来る、これに取弱々と逃走る、土屋長吉と申ものこれもちからを得て城戸口より追返して、針崎の一向宗にてありけれ八、と主君の御恩にかへ

(なんぞ)
なむそ 宗門に同心せんやとて御方申す

りし事とも也、其日半時はかり戦ありて

此時鉄炮にてまつたゝ中を打ぬかれたり、漸

相引に退なり、味方にも土屋をはしめ

上和田の城へかき入る

能士四人討死する、大将御手ををろさせ給へは

家康公土屋か手を取、御手の上へ置せたまひ

敵に首をとられず、敵方にて八久世平四郎

て最後を惜ませ給ふそ忝き、土屋行年

を始として十人計討れたり、同廿五日の

廿三二而死す

夜深沢八九郎・青山虎之助兩人佐崎へ忍ひ

家康公岡崎の城へ御帰りありて御鎧を

入、寺内を焼払はんと申て密に出ける処に

ぬかせ給へ八、矢のあとあまたありければ

御方の内より敵地へ内通する者ありて

御運のよき大将なり、其上召れたる御物

太田か一族か帰りに臥て右の兩人を討殺す

具ためしなれば御身にあたらず、あやうか

家康公は、二人の者忍ひ入らは乗込給はん

と思し召、人数を分、夜の明るまてまたせ給ひて寺中へをし込、大将とかしつく高橋
たまへは、夜あけて敵方にてかの二人の首小平太夫を天野三郎兵衛か討取也、水野
をさしあけて呼びけれ八、力及はせたま下野守殿の手へ八榎津・鷲塚の両寺中
はず引入させ給ふなり、二月八日に西尾のよりしたひける処を取て返して半里の間
城へ兵糧入に御働あり、直に行は三里のを追討にして大将の鈴木弥兵衛を苅屋
道なれ共、桜井・小川の寺・八面迄敵地なれば衆の上田平六が討取る、其外五・六十人討取也
苅谷の水野下野守殿を加勢に御頼ありてかくて渡路に吉田太左衛門と云者あり
二千計の人数にて西の野へ押出して六里けるか、御方申て一揆方の本多をかたらひ
の道を廻りて入させ給ひて御帰には御調をしめし合て大久保の一族を渡路へ引
働き共有之也、三月八日には八面へ御馬を寄入て一時に焼払ふ故に、一揆方の衆皆針

崎の寺中へこと／＼敗北する、此時寺内 三左衛門・同四郎右衛門に人数をあひ添へ、かの

を割り、坊主衆をは国を払はせ給ふ故、思ひ 城を取巻城より外へ一人も出さず酒 井

に他国したり、永禄六年癸亥十一月に一揆 忍に 蜜 城 蜜 城 を

をこり、明年甲子三月に治る也、悉一向宗 忍に 蜜 城 蜜 城 を

を法度に被 仰付、小寺まで追放ありて 東三河へ御手遣ひありて、西の郡鵜殿か城を

諸士には起請を書せ給ひて赦免ありて は松平甚太郎并伊賀衆忍ひ入、鵜殿を討

召出さるゝ衆もあり、又牢人する者もあり とりて子共二人を生捕る也、其時今川氏直より

かやうにはやくしつまる事八叔父二而御 鵜殿か子共二人を家康公の御惣領の駿府に

座(まじ)ます水野下野守殿の御加勢ゆへなり 置奉る竹千代君と替合と宣ふゆへ、人質替

うへ野の城へは取手をさせ給ひて水野 になりて取代給ふ也、岡崎の城に御座ゆへ後に八 岡崎の次郎三郎信康と申

奉る、御母八今川家の関口
刑部太輔の息女と云々
いよく駿河と御手切れに
なりて

其時に本多平八郎
後号中務
太輔と牧野惣次郎

一の宮に取出をかまへ給ふ処に、氏真駿河
鎧を合する蜂谷半之丞討死する、其年

遠江二ヶ国の人数を引率し、一万余騎にて
東三河不残治る也、其後武田信玄と御約諾

発向して牛窪に陣取給ひて先衆一の宮
有之家康公に八遠州を川切に伐取せた

を責る也、家康公の人数(わずか)纒(わずか)に三千騎にて
まふへし、信玄に八駿河を乗取申すと宣

後詰をし給ひことく追払ひ、敵陣八幡と
合られ、両将両国へ御出馬也 家康公八井

佐脇の間を本野か原へ押出して、其夜八取
ノ谷三人衆近藤平右衛門後石見・
菅沼次右衛門・鈴木平兵衛御案内申て

手に御陣をとり給ひ、翌日本の道を押
遠州へ討出給へ八、久野二股も御手二付蝮塚の

通らせ給へとも、氏真出たま八さるゆへ御馬入也
小笠原も御方に参る也、
此時見付の国府にて甲州の
士大将秋山伯耆守追払

其後下地へ御働あり、駿河衆と迫合これあり
八かねて大井川切と宣候所
に狼せきの出張ところ也
同永禄十一年戊辰十一月二

家康公廿七の御歳、遠州も大概随へさせ
年庚午 家康公廿九の御歳二月は

給ふなり
金か崎へ御加勢あり、其後越前衆北近

同十二年己巳 家康公廿八歳の御時今川氏真駿州
江へ出張する故に信長公馳むかはせ給ふ也

を信玄にとられ給ひて朝比奈備中
か居城懸川へ引入こもりたまふなり 懸川の城へ
大切の御一戦とありて自

をし寄給ひて天王山の構を取合時、きひし
家康公五千余騎にて御加勢也、六月廿八日

く戦ありて一騎当千と氏真のたのまれ
姉川にをいて合戦あり、信長公の先衆

たる伊藤武兵衛大膳などいふ者を討取
合戦利なくして浅井に切立られ敗軍

也、其後扱になりて城を渡し、氏真八北
する 家康公備を乱さす五千余騎を前

条氏康の聳なれば小田原へ退きたまふ也
後左右に備、無二無三に切て入給へは、朝倉

其後浜松を御居城となし給ふ也、元龜元
し八しさへて戦けるか、遂にこらへす

悉く敗軍して木の本迄追討にしてなり、元龜二年辛未家康公卅の御歳

敵千五百人の首を打取給ふ故、信長公大に武田信玄かねて八天龍川切とこそやくたく申処に家康の大井川切と宣ふ八心得すとて

勝利を得給ふ也、同年の十一月また越前出東三河へ発向して足助の城へ取かけせめ給ふ

張して比叡山に陣を取る、信長公志賀のゆへに鈴木城を渡して降参する、吉田二連

湯に陣取給ふ、其時八酒井左衛門尉・石川日向木迄働給へ八、筑木陀峯(田峯)・長篠も山家三方

守両大将として三千余騎信長公への御加勢を持居けるか信玄へ随ふ也家康公五千

也、其後に次の年也信長公御上洛の時の御加勢に八余騎にて馳むか八せ給ひて吉田の町口にて

松平勘四郎信一後伊豆守と号に諸家中よりせり合有之、をのく鑑を合する也信玄それより長沢・牛窪・

人数出合にして付給ひてつかわされけり、この設楽筋へ働引入給ふ也、同三年壬申家康

とき箕作の城を勘四郎信一手柄にて乗取公卅一の御歳信玄遠州へ出張して来原・西嶋

に陣を取、御方の衆各見付の原へ討出ける処を三手に備給へ八 家康公一万計の御人数十二

を甲州勢急にをしかけ、頻にしたひ付て引段にうすくと備押向はせ給ふなり、一番合戦

取事難儀に及ふ処に、其時例の本田平八郎(多)に八本多平八郎・榊原小平太後号式部太輔・鳥居

忠勝、敵味方の間へ乗入て軍勢を携へて引彦右衛門・松平甚太郎・小笠原与八郎五頭にて

退く、此時敵方にて家康に過たるもの八二ツあり信玄は(采配)信玄旗本迄切ておしかければ、

二股の城へをしよせて水の手を留てせめ給ふをとりて太鼓を静にかゝる 家康公も米(采)

ゆへ、城代青木又四郎・中根平左衛門城を明て退く鐘を振て駈入給へは、諸卒命を限りに一時

それより信玄八浜松の北大菩薩を刑部へ押す通りはかりせめ戦へ八、一人当千の者共大概討死

たまふ処を、後備へ足輕をかけて喰留んとし給ふすることわりなる哉、三万に及大敵に纔に

ゆへに信玄取てかへし、三方原にをいて二万五千(たらいす)一万不足の御方にて入替る勢八なく、戦ひ

疲れて遂に悉敗軍する、敵八勝に乗て見えたりと申て、御馬の口を引直して鎧の石追かゝる、落行味方を延さんため、鳥居彦右突にて御馬を打けれ八、もとより御馬八逸物衛門真籠にをいて取て返し身命を捨てなり、走立て出けれ八浜松さして退せ給ふ也乗込防ぎ戦ふ処に、信玄の旗の本より放す夫より次郎右衛門八取てかへし思ふ程防ぎ戦矢に鞍の前輪より袴所を射られ手負ひ討死する、誠に一騎当千の勇士、忠儀(義)の兵とて引退く家康公も取て返し心よくはかれらをや申へき、其比遠州不作にして今一戦して討果すへしと宣ひて、御馬を知行物成不納麦稗を以て上食とす、頃はかへさせ給ふ処を、夏目次郎右衛門御馬の口に十二月廿二日極寒の事なれ八、さむさ八寒し取付て、大将八命をたもち給へ八世に又出るた雪八降る、御方の軍兵四十を頭にして甲のめし古今其品おほく異国・本朝の文にも緒をしむる勇士松平弥右衛門・鳥居四郎左衛門・

本多肥後・榊原撰津を始め城主八青木又四郎めよと宣ひて人数をよせて堅メさせ給へは
中根平右衛門を先として凡六百余騎討死案のことく信玄かの町を焼払へとて人数を
する、浜松の町中大形不残焼ければ皆城中さしつ(は脱カ)かさる、其中より四五十騎はかり真
へ取籠る、信長公よりの御加勢平手も討死する先に進ミて押寄る、御方に八爰にて命
信玄八三方原に陣取して首共実験し備たを捨んと思ひ切たる勇士とも渡辺半蔵・同
り、扨又浜松の城近くに志もたれと云町有半十郎兄弟一番に鎧を合する、其外心懸
此町と三方の原間に七八町の堤あり、西たる者共我も〳と突て出たり、渡辺半蔵
はふけ、東は深田也、かの堤と町の間に敵鎧にて敵二・三人突臥けれ八、弟の半十郎
防きの門木戸立てあり家康公敵に八頭を取る、二・三度込入追出し戦へ八敵終に八
此町を焼れては大事也、をの〳出会て堅引退く、かくて日もはや七ツ過に成たり、又

大久保七郎右衛門諸手の鉄砲を集めつれて
なり、信玄八遠州に依てそれより引入給
集めつれて出て信玄の陣所へ打かけれ
ひて、其後濃州岩村の城を責取、東三河へ
八、信玄形部へ備を入給ふなり、
はま松より
三里北なり 彼地に
出張して病氣再発して討てのほり給ふ

て越年也、天正元乙酉正月それよりうり
事不叶、甲州へ引入るとて根羽にて煩重

の谷をこし長篠へ出て奥の山道を東三
り、駒場と云所にて同年の四月十二日に卒
河野田口へ出張して、かの城を数日の間にせ
す、年五十三にて病死なり、同年天正元

めおとして城代菅沼新八郎・加勢の松平与
癸酉六月 家康公三十二の御歳也、長篠

一忠正と筑手(作)の奥平美作守・長篠の菅沼伊
の城へ取かけせめ給へは、城を渡し引退く

豆・陀峯の菅沼新三郎三人の人質と替合
なり、則、請取らせ給ひて
翌年奥平父子三人と
質をすて、御方申によりて

になりて、菅沼新八郎・松平与市も引取
嫡孫奥平九八郎信昌を 家康公贄になされて奥平
父子に此城をあつけ置給ふ也、戌の年よりかくのことし 甲州

武田信連勝用軒の事なり 遠州森へ発向して所々 渡して退なり、同年甲戌 四月八

放火する 家康公馳むかはせ給ひて逐 家康公三十三の御歳、乾へ御働きありて

払あまた討取なり、其後勝頼遠州表へ発 引取らせ給ふ時、田の大久保村にて御跡備へ敵

向して久野・かけ川へ働き国中を押して放火 したふに依て、御方の若き衆少々討死する

して、天龍川上の瀬を越はま松まで働き真 同年勝頼、高天神の城へ取かけ責る也

籠の河を隔て、刈田をし引上、直田か原に 家康公へ御加勢のため信長公も遠州塩見

陣取て、夫より諏訪原に城をかまへて勝頼 坂迄五千余騎にて出馬有之処に、城代の小

引入給ふなり、其のち 家康公并御惣領 笠原与八郎降参して城を渡し勝頼に随ふ

信康十五の御歳 御初陣として御父子共に足助へ ゆへ、信長公それより引返し給ふ也信長公此時の御憤り

御はたらき有、其比足助布施地者甲州へしたかひたるに依りてなり 早々城を

不浅して、甲州没落の已後、小笠原与八郎小田原へ退きけるに、信長公氏直へ再三御所望ありけれ八、小田原にて

与八郎に切腹させ、首同三年乙亥にておくらせ給ふと也

御成敗ありて当人弥四郎を八浜松・岡崎

家康公三十四の御歳に、御譜代久しき御引渡し、岡崎の四ツ辻にて首きはまで

中間に大岡弥四郎といふものありけるか、彼ほり埋め、竹鋸にて往還の者共に三日引

者に奥郡の代官をさせ給ふ処に、其身富貴せらる、其時勝頼八二万余騎を引卒して

にして栄花のあまりに逆心を企て、爰かし布施地迄出張あり、調(マ)を顕れ略相違しけ

この悪党をかり集めて、まつ足助の城をれば、それより二連木へ働き給へ八家康公

しのひ取勝頼を岡崎へ引いれんと調をする八吉田へ御馬をむけ給ふ、信康八山中法蔵寺

処に、与党の内より山田八蔵と云者うらかへりに御馬を立給ひ、はしか三原にて烈足輕

逆心あらハれ、かの弥四郎父子夫婦以上八人の迫合ありて勝頼引上長篠へ押寄、奥平

搦め取はりつけにかけさせ、其外同類不残父子か楯籠る城郭を七重八重に取巻、息を

もつかせす責る也、其時信長公御父子、十万余

家康御父子 二万余騎

騎にて後詰あり 家康公御父子八野田へ

押出し給へは、信長公八岡崎、信忠八八幡に着

せ給ふ、先衆八一の宮本野か原に満々たり

此時酒井左衛門尉、武功に依て密に鶯の巢へ
押廻り、武田勢を追崩し、悉く討取なり

同五月

家康公御手にて大久保七郎右衛門・同次右衛門

廿一日、信長公 家康公御父子数万騎を引

卒してあるミか原へ押出させ給ひて、勝頼

八強將の破敵なればかゝりて一戦あるへしとて

惣構に柵を付、腰堀をほりて五十間・卅

間に一ツ宛虎口をあけて鉄砲をしかけ待

かけ給へは、案のことく勝頼は家老の諫を

も用ひ給八す長篠の城に押を置、纔一万四

五千^二而瀧川の石橋を打越て一騎打の処を

一里半をしよせかゝつて合戦なり

内藤四郎左衛門・渡辺半蔵・同半十郎等足

軽を出してあいしらい、敵かゝれ柵の内へ引入鉄

砲を以て打立けれ八、敵兵おほく討死する、手

負を捨て引退八付出て首を取、駈入かけ廻

し下知したり、敵五・六度迄入替

〈押込追

出し戦ひけり、甲州方の士大将真田を八渡辺て信長公引入給ふ故に 家康公も御帰

半十郎討取て、勝頼の御舎弟望月殿は陣也、同六月初に八 家康公諏訪原の城に

鳥居彦右衛門手にて永田穂父助と云ものをさへを置せ給ひて駿河上の原まで焼

か組討にして首を取る、尾州衆に八佐久間働して分捕せさせ給ふ也、其時鳥居彦右衛門、諏訪原の城郷導をうかゝはんと

右衛門・滝川左近手少しひるめは、二の手にて城辺へのり寄ける処に、彦右衛門猩々皮の上羽織を敵見しりて弓鉄砲を集て打かけられ八、彦右衛門腰さしの軍配団に二ツ脇指に

柴田・木下突て出れ八遂に八敵悉敗軍一ツ矢当り、其後眼にあたりて馬より落る処を杉浦藤八郎はしりよりて引かけ退候故、彦右衛門命たすかる、それより彦右衛門

して、追討ほとに鳳来寺辺逐かけちんはに七千なる同月末に 家康公二股の城の押へに

余の首を取る、此時、信長公甲州までも押大久保七郎右衛門をみな原の取手に置給ひ、諏

入たまは、甲州八不及申信濃・駿河両国までも訪原の城へ取かけ、七十余日責させ給ひてせめ

同時に可治に、勝て甲の緒をしめよと宣ひおとし、すぐに小山の城へ押寄せめ給ふ処に、勝

頼二万五千の人数を引卒して伊良川まで

後攻なり、其時 家康公小山の城をまきほ

くし、釜塚原をすくに諏訪原へ引退んと宣

ふ処に、酒井左衛門尉申上る八、敵にむかハせ給ひ

て是非とも伊良へかゝりて退せ給へ八、勝頼長篠

にておくれの已後なれはかゝりて一戦ハ必な

るましきと左衛門尉申に付て 家康公も

尤と宣ひて伊奈へかゝりて退せ給へは、酒

井左衛門つもりのことく敵方ハ能者共ハ長篠にて

大概討死して、方々取集め勢の事なれハ軍

なくして相引也、同年二股・高明の両城も落

る也 二股二八あし田これを守る高明に八朝比奈有之、高明の城へハ 家康公御出馬ありて、追手二王堂口へ八本多

平八郎・榊原小平太を押向はせて、御旗本八横川へ移らせ給ひて

かゝ見山へをし上げて、からめ手より城へせめ入に依て、城代朝

比奈又太郎かなハすして降参する 同四年 丙子

命をたすけ置給ふと云々 家康公三十五の御歳、山西の麦刈捨させ 乾へ御働

ありてあつさかへをしよせ給へは、天野宮内左衛門塩見坂

を持かため居たり、大久保七郎右衛門を石か峰へ廻し上よりせめ

落させんとてつかハさる七郎右衛門石か峯へ押上けれハ宮内

左衛門かなハすあつ坂・塩見坂をあけて鹿鼻へ退くなり

八月勝頼、高天神瀧坂へ兵糧入に出張して国

安といふ所に陣を取る 家康公國中へ押出

なり、信康八掛川に陣取給ふ、勝頼国安より甲州 連絡ひて勝頼の旗の立たる処より二町はかり

へ引入らるゝ也、同年横須賀に城を取立て大 ちかくのりよせ物見をし給ひて

須賀五郎左衛門を城代に置せ給ふ也、同五年 家康公へ御合戦ありて御尤と被仰上也

^丁_丑 家康公三十六の御歳八月、勝頼二万計 家康公宣ふは、敵は大軍味方小勢なるに

の人数にて横須賀南とかりの尾さき迄働き 切所をも不構替る手段もなくして大敵と懸

浜辺に陣取也 家康公御父子ともに横須賀 合の軍勝利あらずとて御合戦なし をのく切者 衆申さるゝ八

の城より四町計北なる丸山に御旗を立、諸勢 大殿に八三方原の御合戦 より能御切者に成せ給ふと感し申也

八浜辺へをし出して備たり、敵間三町計隔て其 同六年 ^{戊寅} 家康公三十七の御歳也、山西高

中に入江あるゆへにたかひに鉄砲を打あひたる 天神へ麦苗かり捨に御働きあり、同八月

はかり也、信康八鈴木長兵衛といふもの一人めし 家康公御父子共に山西にて刈田をさせて

諏訪原へ兵糧入させ給ふなり

城代に八松平
甚太郎在之

同七年

代未聞の次第なりとて岡崎の城を出し給ひ

己卯 家康公三十八の御歳、また山西へ麦

大浜へ移し堀江の城へ御越、それより二股の城へ

苅すての御働あり、其年信康八

うつらせ給ひて服部半蔵・天方山城兩人に

家康公の御氣にそむかせ給ふ、その子細八万事

被仰付御生害なり、信康宣ひける八、父に弓

御心のまゝにして御行跡法に過たり

を扱と云事八全偽也、年寄共の讒言なれ八

家康公御異見をも御用ひなくして御氣随ニ

此上とかく申分に不及とて、二人の御女子の御事

行八せ給ひ、家老衆の諫言猶以御取上なきに

御菩提八大樹寺を頼むへき由仰おかれ、大久保

よりて衆の讒言ありて勝頼と御内通ありて

一類その外御親ミ申者共の方へ御形見を送

逆心のよし申上るに依て 家康公御立腹

らせ給ひて念仏御唱へ腹十文字にかき切て

よの常ならず、子の身として父に弓を扱事、前

服部介錯申せと宣へは、三代相恩の御事なれ八

半蔵も刀を捨落涙する、早疾と宣へ八力及うちに 家康公それより早く諏訪原の城へ

はす 遠州の住人に 天方山城泣々御介錯し奉る、可引入給へは、其後勝頼田中の城へ入給ふゆへ軍

惜おしかるへし、其年八月十五日行年二十一なし、それより勝頼引取給ふ也、同八年 庚辰

にて生害し給ふ也、家康公にも人口 家康公三十九の御歳二月、高天神へ御馬を出

のさゝへによつて不慮の生害と御後悔の御 され、相坂中村に取出を構へ給ふなり、同六月また

詞たひくありとかや、同九月十九日山西へ御働き 高天神へ御馬を出され、鹿鼻相良^二取出を構さ

ありて持宗の城を責落し、三浦兵部・向井 せ給ふ 此外小笠の取出八其前にとらせ給ふ也 同十月八 家康公高天

伊賀守父子を討取、とうめに陣取給ふ処に 神へ押寄給ひて横須賀を御旗本として酒井・

其時勝頼、敵北条を捨いそきはせ向ふ処に 石川・水野・大須賀・本多・平岩・榊原・鳥居・大久

富士川水まして越事ならず、馬を立給ふ 保・戸田・内藤・植村・三宅・松平、其外三州・遠州

の諸將ともをのく城を取廻し、四方に堀をほ七郎右衛門持口へ両手に分て切て出悉討死する
り柵を付、明る年の三月まで百七十余日せ番手の頭岡部丹波を八大久保七郎右衛門手にて
め給ふ、城中に八兵糧米もあひつゝかす、忍ひ本田主水といふものか首を取、横田・相木八無念
く城より出、蕨・虎杖(いたどり)をほり、芹・藜(あかぎ)をつみて切ぬけたり、孕石主水八生捕になる、其外の
糧とする、され共城兵堅固にして虎口くを打者とも爰彼処に押詰をいかけ首を取、凡諸手
廻り油断なく防くといへとも、勝頼後詰ならさへ取首数以上六百八十余人也、同九年辛巳五月
れ八城中番手の軍兵共岡部丹波・横田甚に八家康公四十の御歳、田中とうめの妻
五郎後号甚右衛門と相木・栗田・孕石を頭として田刈捨に御働ありて伊良瀬を退給ふ処に
其外不残内談して、明る天正九辛巳三月廿二日持宗の城より朝比奈駿河守者共付慕ふ、其
の宵過に城中の兵とも、石川長門守と大久保時御方に石川伯耆・平岩七之助・鳥居彦右衛門

内藤弥次右衛門・酒井与九郎・松平和泉・足助小笠

原か取てかへし、城際まで追討にして能士

とも五十三人までうちとる也

天正十年^{壬午} 家康公四拾一の御歳、武

上の原へ 家康公出会を給ひて穴山衆を
先手として甲府へ入、市川に御陣を取給ふ

田家の穴山梅雪 玄藩允左衛門大夫信行事也 御方申さるゝに

其時信長公は木曾義昌御方申されけるゆへ安
(味方)

依て 家康公八浜松より駿河路を甲州へ

土より信州木曾路を伊那郡へかゝり打入給

いらせ給ふ時、各々行軍、田中の城に八芦田有之

ひて諏訪に御馬立なり、信忠八高遠の城

依田右衛門事也 此時城中より足輕を出してつけゝるに依て取てかへし城へ追入引上る時、城兵鉄砲を打かけくいとめ

へおしよせ給ひ、仁科五郎 勝頼の并小山田備

けるによりて、其時鳥居彦右衛門馬を馳城辺に赴く携軍勢ヲ引退なり 持宗の城には

中をせめ殺し給ふ也、去程に勝頼はしめ八三

朝比奈有之 駿河守事也 鞠子の城に八屋代有之 左衛門事也

万計の人数にて諏訪出張して合戦の評定

其外久能小山の城とうをしよせく、或八責取

し給ふ処に信長公 家康公両口より打入

降参あけ渡したり、穴山は江尻の城を出て

たまふ、其上に穴山を始一家譜代の衆逆心

なれは甲信兩國騒立て子を逆(なにかま)に負(おい)山入り

これらも別心して弓・鉄砲を射かけうち

すれは、打寄たる三万余騎の者とも、父母

かけて入れ奉らす故河原に並居給ふ処に

妻子(しりぞけ)を退るとて大形落失たり、かくて八合

信長公より射手灌川左近將監・川尻与兵衛追

戦なるへからすと勝頼新府中へ引入給へ共、たて

かけおしよせたり、勝頼八土屋・小宮山其外

こもる事あた八すして小山田兵衛尉を頼

相隨ふ者とも防矢射ける、其内に其身信

として岩殿へ楯籠らんとて郡内へ退給へは

勝父子夫婦枕をならへ自害し給ふ処を土屋惣

信茂忽逆心して相伝の主君にむかつて

蔵介錯申し念頃にほり埋め、女房達まで

弓をひき鉄砲を打かけれ八、かな八すして

さし殺し勝頼父子夫婦埋メ奉りしその上に

天目山へ入らむとて落行給へ八、家人甘利甚

しき皮敷て腹かき切臥けれ八、其外小宮山

五郎と大熊新右衛門なり 聳 舅 兩人先に居て

内膳を始として最後の供の衆百余人命を

限りに戦死たり、信長公八甲州府中へ打入て 木曾殿・穴山殿へも本領の上に御加恩あり松

武田一家譜代の衆、今度逆心したる者とも 平甚太郎に八諏訪の原の城に永々これ

大形不残討殺さる、また甲府恵林寺の僧中 あり忠節辛勞分にと宣ひて富士の根方

を三門へ追上げて下より火をかけ、国師和尚を 川東を賜りて三枚橋城代に仰付らるゝ也

始長老平僧児同宿に至るまで百人余り それより信長公同四月二日に甲府を御立

焼殺さる その意趣八佐々木承禎の子息井公方よりの実福院
大和淡路、信玄の時より甲府に詰居けるを今度 ありて駿河路を富士の根方を御通りあり

寺中にかくし置、信長公色々に
宣へとも出し給八さりしに依て 其後信長公於甲府国 て遠州三州へかゝりて安土へ御帰陣也、同

割あり、駿州八 家康公へ被進、甲州八川尻 五月 家康公穴山梅雪御同道にて安

与兵衛、信州伊奈の郡は毛利河内守、上州は 土へ御見廻あり、信長公御馳走のため四座

瀧川左近将監其上関東管領職任せらる、其外 に御能仰付られ御祝儀の御能ありて

のち、信長公御父子 家康公、穴山殿も 伊賀国を通らせ給へ八伊賀衆御馳走申
御同道にて上洛ありて其上にて
をくり奉る、勢州白子より舟にめし給ひて

家康公に八(ついで)此次而に堺を見物あるへしと
尾州とこなへの浦に着き三州大浜へ上らせ
給ひて永井伝八郎処にて御休息あり

習より長谷川於竹をつか八さる 藤五郎秀一
事也
それより西尾へ着給ひてはま松へ入らせ給ふ

家康公穴山殿を打連て境(堺)へ越せ給ひし
なり 今伊賀御馳走申そのもと八先住信長公
州を伐り取給ひて地衆ことこ

其内に明智日向守光秀 号 惟任日向守丹
波 一 国 江 州 志 賀
と 切 にく し な て だ

郡の領主也 逆心して同六月二日に信長公四十九
他国したるものをも引かへして成敗ありし時 家康公の
御領国へ落来るものをはかくし置給ひて一人も不出御かゝへ

信忠廿七歳にて殺害し奉る也
置給ふに依てその一類のこり居て此時御方申也、服部とふ
これ也、穴山梅雪八 家康公をもうたかひて遙のあと

家康公境にて聞召急て御下向あり
を退き給ふ故野伏とも 家康公大浜にて本多百助
の手にかかり討れ給ふなり

をめして、汝は兼而川尻与兵衛と知音の事 二万計の人数を引卒して京都を立古戦
 也、急て甲州へ行て其辺一揆とう起り乱は 縄手を隔て陣を取ところへ秀吉押寄給へ
 加勢をくらくらんと可申、とてこし給ふ処に 八、光秀八甥の明智左馬助を大将として七千
 川尻辱しと申て百助を餐して其夜蚊屋 余騎をすくめて一戦を始む、天下の安否此一戦
 の内にて百助を長刀にてさしころす、それ にありとたかひに采鐺を振てせめ戦ふ、遂に
 より方々一揆をこりて川尻をも討殺す也 光秀馳負て山科をさして引退く、野伏とも
 其頃羽柴筑前守秀吉八芸州の毛利家 出会て麻畑の中にて討殺す 其時天正十
六月十一日也 光秀
 と取合、播州と備前さかいに相陣をとりて 行年五十六、家人の斎藤内蔵助・明智庄兵衛
 ありけるか、信長公御生害と聞毛利家へ断 を八生捕て粟田口にてはりつけにかくる也、戦
 り和談を入、急て馳上り上崎(マ)に着処に明智 死其数千五百余也、織田七兵衛信澄も光秀

一身なれ八大坂にて織田三七郎をしよせて責
 の城より北条氏直西上野発向を追払はん
 殺さる、筒井順慶八和州より討て出、宇治近辺
 とて上武の境神名川へ出張して同年の六月
 に陣を取て天下の安否をうかゝふ処に明智
 十日北条衆と合戦して討負(悉)敗北して箕輪
 討負けれ八やかて秀吉へ隨身する 家康公
 の城へ引籠る、同廿日打立真田を頼三て人質を
 は浜松にて人数を揃へ尾州鳴海まで御出馬あ
 取て臼井を越、道々人質を取かへ〳尾州まで
 りてそれより引返し甲州へ打入給ふ也、其時御先
 無恙退たり、此競によりて氏直八甲信両国
 手二酒井左衛門尉・大須賀五郎左衛門・大久保七郎右衛門・
 を可治とて五万余の大軍を卒してこれも
 石川長門守也、本多豊後守・岡部次郎右衛門・穴山
 おつこつへ着陣也 家康公五千余騎大敵と
 梅雪(信)衆州諏訪郡をつこつへ着陣する、其頃
 駈合の合戦あやうしとて甲州新府の城へ引
 信長公の士大将瀧川左近将監一益八上州前橋
 入給ふ、其時殿に八岡部次郎右衛門二穴山衆三八

大久保七郎右衛門^{四八} 本多豊後守^{五八} 石川長門守

六八 大須賀五郎左衛門を先に立て、六手合て三千

余の備にて五里の道を引退せ給ふ、敵兵をし

かけ慕ふといへ共各々武功に依て御方一人も

討せず引取らせ給ふ、其日新府の城へ入給へ八敵

氏直八わか^(若神子)三に陣を取、其間廿四五町を隔

て中に大谷あるゆへ軍八なく同年の七月より

同十月まで百日余の対陣也、其比甲州郡内八

小田原領になり北条左衛門佐を置給ふ、その時

左衛門佐筑井の城主内衆を引卒して八千余

の人数を以て郡内より山通りに東郡へ出て所

々放火して焼働也、其時 家康公古府中の

番手に鳥居彦右衛門・水野惣兵衛・松平玄蕃・

三宅惣右衛門をつか八し置せ給ふ処に聞へ、急

馳向て北条左衛門帰路を黒駒におしむかふ敵の

軍平を及見八八千余、御方八纒に二千にたらず

一戦あやうく思ふ処に鳥居彦右衛門手より鈴

木源助といふ者真先にすゝんて駈入八鳥居

彦右衛門采^(配)拜を取てそれ討すなとて下知し乗

出す、其手の者とも百騎計一度にはつとをし

かけ追立る、是より諸勢われも 〱 押懸 〱 追

崩す程に敵委(悉)敗北して三坂をさして逃上る

追かけ
追

討に敵兵都合三百七十五人諸手へ討取る、其首

を新府に渡して敵方陣処に梟させ給へ八敵陣

騒驚なり、其上に真田・芦田一手になり白井を

取切と聞ゆる 是八大久保七郎右衛門計策にてあし田を引
入て真田をかたらひ御方にする也、芦田八先

年二股の城を七郎右衛門に渡して退て、又其後に立歸りて
味方にしたかひ申時も七郎右衛門取次申ゆへ二重の知音にてあ

ED * 102 * "Font:メイメイ" * hps22 * kskad (skknp 21) (ふじゆ)

し田 情 を 一 出 す 入 也 故に氏直不叶してあつ

か ひ を 入 和 睦 有 て

甲州郡内と信州佐久諏訪両群を

家康公へ渡し給ひ 家康公より八上州沼

田を返し渡し給へとありて、其上氏直八

家康公の聲に御縁組定りて相陣を引

取給ふ也、去程に 家康公甲州を治させたま

ひて則郡内をは鳥居彦右衛門に下し賜る

是より彦右衛門八岩殿城へ移り居る也 其時
の命

にいはく、汝劔鋒
の力によると云々 それより信州佐久の郡へ大久

保七郎右衛門を遣し給ひて御馬入也 其時大
久保七郎

右衛門於佐久郡野沢の古城を取て岩村田小室根津望月
内山岩瀬甘取柏木平原田の口海の口平尾あらこなと

云城衆小屋々敷かまへ持たる小身の地土ともをことく引付御方にする也其節岩殿城をのり取とて依田右衛門

同源八兄弟ともに討死する也、右八年の年の秋より申の年までの間かくのことし、其外諏訪下条伊那郡大草とち

くらをも其前同十一年癸未家康公四十二の七郎右衛門引付る也

御歳、小田原へ御輿入なり、同十二年甲申

家康公四十三の御歳、秀吉公と取合始るなり

其趣八秀吉公明智光秀を討て後織田信雄

常真事也を取立申さんと宣へは、柴田勝家八三

七郎信孝を引立んとて両家中取合に成

柴田八越前より打て出柳瀬に陣を取、秀

吉も押出し相陣を取て足輕のかけ合

あり、其時加藤虎之助主計事也同孫六左馬助事也福嶋・

脇坂・糟屋・片桐・平野七人之衆鑓を合する

世に七本鑓といふ八この事也其時前田又左衛門加賀大納言利家事也・丹波五

郎左衛門等別心に依て柴田討負越前へ引入

自害すれ八、秀吉公岐阜の城へをし寄三七

信孝をせめ落し野間の内海にて殺害して

其後秀吉公信雄卿をも却て失はむとし給

ひて、信雄の家人岡田長門を引付逆心あらん

に於て八尾州を則与んと朱印を出し、并に

津川玄蕃勢州松崎の城主也・浅井民弥尾州苅安賀の城主なり

等をも引付給ふ処に此計策顕れて岡田むかつて責けるに、城中より須賀太左衛門と

長門を八信雄手討にし給ひける同年三月三日なり津川名乗て城戸をひらき土橋を押越し只吉人

玄蕃をは飯田半兵衛に討せ、浅井多宮をはすゝみ出ける処に、水野惣兵衛手より鈴木与八郎

森勘解由討也、岡田長門か領地大野とこなへ二と名乗て出太左衛門と鑓を一番に合す、つきに

有之をは信雄家康公より清水権之介・都築と名乗て同太左衛門と二番鑓を合す

戸田三郎右衛門兩人を遣し請取らせ給ふ也それより同勢押かけられ城中の者とも太

本領星崎の城に八岡田正五郎・山口半左衛門左衛門を討すましとて丹羽助左衛門等を

永田弥左衛門・須賀太左衛門なとゝいふ者籠り居け始として我も〈と大勢討て出てせり合

るを家康公より酒井与四郎・石川伯耆・水たり、其時丹羽助左衛門も鑓を合す、たかひに

野惣兵衛和泉事也・松平左官・内藤弥次右衛門等馳相引にして其後十日はかり城を持こらへて

あつかひを入れて城を渡して岡田庄五郎と一戦して悉切崩し、十二三町余り追討

八長門守弟
伊勢守事也

上方へ立退なり、山口半左衛門・永田にして敵兵廿四五騎討取なり、されとも森武

弥左衛門・須賀太左衛門八尾州に其俣置給ふ蔵も名ある勇士なれば岩崎に陣を取

なり 家康公八信長公御厚恩を違へ給る、酒井左衛門尉八小牧近辺へ押して陣取なり

わす信雄卿と御一和ありて御加勢なり、故に同廿八日に八信雄 家康公も御旗を小

秀吉公十万騎を引卒して尾州へ発向 牧山迄寄せ給へ八、秀吉公十余騎に

あり 家康公八所々の押へに御人数を差 て犬山を根城にして青塚近辺に陣取た

置給ひて一万五千騎にて御加勢也、酒井 まふ也、同四月九日には池田勝入父子・森武

左衛門尉・奥平美作守を大将として五千余騎 蔵、大将に八三好孫七郎秀次数万騎を引

岩崎山へ押出し、同三月廿五日二森武蔵守 卒して三州へ発向して跡を取切て岡

崎まで焼はら八んとて押出す

四十余人一人も不残討死する、敵勝鬨(かちどき)をあけ

家康公此よしを聞せ給ひて旗をしほらせ

勇ミすゝむ処に御方の先衆をのく押寄、大

密に小牧を出させ給ひて勝川といふ処にて

将三好秀次の扣へ給ふ旗本へをしかり切崩

御鎧をめされて大須賀五郎左衛門・榊原小平

し逐討にして首を取、岩崎さして追詰たり

太・本多豊後守・水野宗兵衛・植村庄右衛門・

敵方に八岩崎の城を責取て競居ける処な

丹羽勘助を先陣として押向はせ給ひ八、敵八

れは何かはためらふへき、堀久太郎秀政・長谷

はや岩崎の城へとりかけて辰の刻の始より

川藤五郎秀一 一陣にすゝんで大声を揚

巳の刻の半までに攻落す、城中に八丹羽

て押駈たり、敗北の敵是を力として取て返し

次郎三郎を始として相隨ふ者ともに八須賀

けれ八御方追返され小幡春日井郡古城なりをさして引

四郎右衛門・同六蔵なんと云ものを先として

退く、各采掇(采配)を取乗かへしく下知して引退け

けれ共御方軍兵二百余騎討れたり

奉行は算勘右衛門・渡邊半十郎か御馬印

家康公御旗本に八井伊兵部少輔を先として

を山陰より敵の後と見ゆる所の山上へ見す

三千余騎押出させ給へ八、池田勝入父子・森武蔵

まして押上たり、敵兵これを見騒立て見へ

両大将として数万騎にて押向合戦始る

ければ御方利を得て押かけ押崩す、敵悉

家康公御旗本より水野太郎作・大久保次右衛門・

く敗北する、平松金次郎・鳥居新太郎左京亮・

渡邊半蔵・酒井与九郎・加藤喜助・森川金

同金次郎四郎左衛門等鎧を合て首を取る

右衛門・高木九助・渡邊弥之助・神谷弥五助・嶋田

御馬辺に八内藤四郎左衛門・高木主水下知す

次兵衛此十人の者ともを頭にて鉄砲二百挺相

る、敵方の大将池田勝入を八永井右近討取同

そへて御先手井伊兵部少輔備へ遣したま

紀伊守も勝九郎討死する、森武蔵守を八本

へは、をのく馳むかつて入替く打立たり、御旗

多八蔵首をとる、半道計追討ほとに敵兵

二千余人の首を討取たり、秀吉公八味方敗軍 疲れたる少勢、ことに逃る敵に追すかりて備み

のよしきこへければ青塚より五万余騎を引 たれたる処なれ八合戦あやうかるへきを、内藤四郎

卒し長久手へ馳向ひ給ふ処に、其時本多 左衛門・本田弥八郎か積によつて急て御旗を

平八井石川長門守・松平上野(マ)守 小牧の押へに 小幡の城へ引入させ給へ八諸軍勢も早々引上

ありけるか、秀吉公長久手へ押向ひ給ふと見て ほとなく秀吉公押寄給へ共無別条、小牧に

秀吉公陣場より四五町はかりのあひたを(わずか)纏 残る人数は信雄卿の尾張衆と酒井左衛門・石

に五百に不足の備にて少も臆せず長久手へ 川伯耆都合一万五千也、其時酒井左衛門尉申

押通り 家康公を御供して小牧山へ立 八秀吉公本陣へ近々と旗を寄せ爰に於て

帰る此時の働を敵味方共に
ほめさる者なし 家康公今少追過させ 二重の堀を押破り敵の陣屋放火して

給ふものならば、秀吉公新手の大軍と出合て 焼はらふものならば長久手表の敵敗軍あ

るへし、石川伯耆守にも早々旗を寄給へとむけせめさせたまへ八十日計持こらへ、不叶し
三度に及んで使を立けれ共伯耆守八其頃よりて瀧川左近は城中より船に乗りあさましき
秀吉公へ心をよせける故か一円すゝまされ八、左体にて伊勢国へ落行也、前田与十郎三日城を
衛門尉一手にてすゝむにあたはずとはかみをもちこらへ、不叶して石川伯耆守に城を渡し
しなから留りぬ家康公其日に小牧へ引退たり、其より信雄家康公勢州へ御馬を寄
返し給ふ也、秀吉公も龍泉寺より青塚へ引白子神戸放火して濱田の城を乗取清洲
かへし給ふなり、あくれは十日秀吉公引取給へ八へ帰らせ給へ八、同七月秀吉公しのきに城を取
信雄家康公も同日清洲へ御馬を入たまふて八月尾州ならへ出馬して下里ならに城を
同六月十四日蟹江の前田か城へ瀧川左近を引とり給ふ、信雄家康公三井の志源寺に
入て敵になる、信雄家康公則人数を出し城をかまへ御帰陣也、同十月秀吉公勢州へ

出馬あり、また信雄 家康公桑名まで

御出張、まちや川と云ふ処にて取合足軽せり

合有之処に公家衆六条門跡馳下らせ給ひて

御あつかひありけれとも 家康公御承引

なし、されとも信雄和睦し給ふゆへ 家康公も

御無事たるへしとあつかひありて御一和

調ふなり 或云、足立清左衛門と云ものひそかにあつかひ於
勢州矢田河原に十月廿日信雄卿と秀吉公対

面々信雄勢出奔速相睦とのこと也
時三河勢二万余と云、真田八其時沼

田 上 田 両 城
合 九 万 石

申遣す所に無異儀畏入のむね上使に相
の同也

のそへ 家 城 来 丸 主子

海野三右衛門を以申八、三日の内御待可給、住荒したる城内掃
除仕急度去渡し可申、全不及異儀よし申つかはす故三日

の 内 相 待
所 真 田 申

は 掃 除 候 へとも 家 子
中

出 来 仕 候 へとも 家 子
中

家 中 の 妻 子
等 近

城 下 以 て
近 国 近

た の み っ か わ す 処 に 当 時
以 て

落人同前の仕合に依て古親きものも意を変し、たのむた
よりなく途方をうしなひ候間、年来の家人共妻子等乞食

の躰になり見捨候へて八生涯の恥辱これに不過候間、此上八
某下知をく八へ何方へなりとも引取せ申やうに仕度存候間、今

日より三日延引を待可給候八、御芳志これをわするへからすのよし理を尽し詞をたくみにしてかさねて申こすによつて

をの／＼諸將打寄談合あり、真田は甲州家にても弓箭の功者武略の達人なり、いかなる手段表裏をやなすらんたゝ

おしよせ責取給へと申もの少々ありといへとも大かたをの／＼真田申所も尤、我も人も城主の作法かくあるへし小敵の真

田武略あるとも何ほとこの事をなすへき、甲州家の先方衆味方の自満めつらしからず、渡すましきと云へ八こそわたす

へきといふ上押寄る処にあらずとてまた三日延引する、依之真田思ひのままに手配して根津矢沢虚空蔵山高戸

石の城等其外所々に人数を入草を伏せ相図を定め評儀をとゝのへてのちまた使を遣して申八、かねて八家中の妻子等

かなたへ頼遣し候へとも時分の儀にて候へ八したしきも心を変したよりなき身と罷成て候、左候へは御約束の日数も過御待遠

にも可有之候間、をの／＼御手柄次第御責取候へと使者馬上に於て申捨一足を出し馳帰る故、御方の諸將大に憤り大軍を発

し急におしよせにねむり入行、如書敵、木戸口にさゝへ防き戦ふの刻かね

てて 所相 々図 のと 山見 々候

谷峯伏兵おひて圍をあげて鉄砲を放け、矢、をなし前後左右に旗をあけ蜂のこ

とく、に御方このるに、依て、

勢さ八き立て、攻口を引退んとする時を得て昌幸採押を取て城戸をひらき突立るによつてなり、また其頃真田

安房守次男左衛門佐を景勝へ出仕を逐させ、川中嶋におひて一万石を所領す、これに依て越後勢後詰のために出張する

也と、同十三年乙酉、家康公四十四の御歳云々

信州小縣郡真田安房守居城上田へ御人数を

向給ふ、其人々に八平岩七之助・鳥居彦右衛門・

大久保七郎右衛門・保科弾正父子・芦田諏訪・岡部

内膳・下条知久・大草屋代・越中三枝・土佐芝田

井井伊兵部少輔・名代木股土佐等也、此趣八年北条

氏直と御一和の時兼約の城地を氏直より

八乃去

EQ * j00 * Font: Mの明朝 * hps22 *0(\$k\$up 21) (\$h \$h \$h)

渡し給ふゆへに上州沼田の城を北条

殿 へ 真相 渡 田 方 へ き
よ し 真 田 方 へ き

仰つかはさるゝ処に安房守用ひす、此沼田領八

家康公より申請たる領地にてあらず、我劔鋒の刀を以伐り取

たる処なり、今度 家康公へ御方申八御忠節とこそ存る
処にかへつて我等辛勞して伐り取たる地を召放され北条

氏直へ渡申さん事なか 思ひよらすと申切て北条家へ相渡さすゆへ

に、大導寺駿河守来て

EQ * j00 * Font: Mの明朝 * hps22 *0(\$k\$up 21) (\$h \$h \$h)
訴白に

依てなり

八月二日各々かゝ川を打越て上田の城へ押寄る

真田も城より七八町大宮といふ処へ足輕を出し

て鉄砲を打懸迫合たり、寄手の衆これを事

ともせず大軍一手に成て追立けれ八城下さ

して引退く、寄手の衆勝に乗てこれを逐て

何の手行もなく海野町迄乱入る、城中より

鉄砲を以防きさゝへたり、かねて相図と見へて

所々の山々峰々に伏兵おこつて旗を上、時

を作り鉄砲を放すに依て寄手のをの

<

引上んとする処に、真田安房守昌幸采押

を振て城戸をひらき一度にとつと突て

出けれ八、寄手の衆追立られ廿四五町

追崩され二三百騎討れたり、平岩七之助・大

久保七郎右衛門等采押を取て藤の森と

いふ処にて取て返し 一支 戦ひけれとも
(\$h \$h \$h)

引立たる味方也、競かゝりたる敵なり其うへ 其間に彦右衛門もかゝ川を乗越引退吉田
川中嶋より加勢の人数二の手に寄来り の台に旗を立敗北の土を集め備ければ、諸
けれ八其より悉敗軍してかゝ川を過岩 手の衆も段々に旗を立たり、真田も川のはた
下近辺迄大形敗北したり、鳥居彦右衛門 まて押寄けれとも川を八不越、黒壺の台
手八いまた不崩して後陣に引退処に戸 へ旗を打立て勝鬨を上て後引入ければ
石の城より真田伊豆守源三郎信之・左衛門佐 寄手の衆も相引に退く、翌日鞠子の城へ働
源次郎兄弟采拝を取て押出し染屋か台 あり、真田又押向て八重原にをいて相陣を
と云也へはたをゝしあけ先途を取切らんとするに 取る足軽せり合あり、されとも真田八其頃越
依て敗軍する敵手しけくしたひ付、其手 後と一味なれ八景勝よりの加勢河中嶋衆新
の者とも三十騎計取て返し討死しける 手に助来り二の手に備て(ひかえ)扣たり、味方は悉

く討死手負疲れたる敗軍の備を以て重岡崎まで御下向也 家康公井伊兵部

て不能戦事とて夫より諸将引取なり、同年少輔と大久保七郎右衛門と兩人に預けおかせ

の暮に石川伯耆守 家康公をそむき奉給ひて御上洛あり、其時秀吉公御祝着有

て妻子を引連岡崎を立退き秀吉公へ随て任官大納言にし給ふ也 或曰太閤浅野弥兵衛長政を使として

身する也、その時 家康公は早々岡崎の城へ 以再三天下の相談可申事あり、全別心なき間往来するといへとも 家康公御承引なきに依て母公政所為人

移らせ給ひて御仕置等ありて帰らせ給ふ也 質下し可給、其上弥兵衛一通の起請持参するゆへに御上洛可有之と云々、これに依て政所御下向あり、後井伊兵部少輔

同十四年 丙戌 家康公四拾五の御歳 をくり奉る上洛の時、任四位侍従にこれより号井伊侍従

秀吉公と御無事に依て秀吉公の御妹 同十五年 丁亥 家康公四十六の御歳

聲にならせたまひて御輿入れなり、御上洛と 同十六年 戊子 家康公四十七の御歳

ありて秀吉公の母公政所を人質として 同十七年 己丑 家康公四十八の御歳

同十八年庚寅 家康公四十九の御歳、秀吉

数万の大軍を以十重廿重に取巻、城口際迄

公小田原進発として五十五ヶ国の大軍を引 仕寄て押詰攻之 家康公八今井一色浜

卒し浮嶋原へ押出し、そうか原に陣を取 手を請取らせ給ふなり、信州臼井口へ八前田

葦山城へ八北条濃州氏親城也福嶋・蜂須賀・生駒・戸田

利家後号加賀大納言・上杉景勝後号米澤中納言大将として

伊賀侍従定次筒井順慶子也等さしむか八せ箱根山を

北国勢并信州真田同勢として押出し上

平押におし上て山中の城を一時に攻落し 州松井田の城をせめ落し大導寺駿河守

其日に小田原へ押寄る、秀吉公は石垣山に 以降参させ松枝まで取寄城々請け取たり

陣城を構へ石垣高く築上櫓井楼大門 関東表へ八伊達政宗・佐竹義宜・石田治部

建かはらをふせ白土を付少の間に城に取 少輔三成大将にて城々取詰請取、一手は浅

立、小田原の城中を目の下に見をろして 野弾正少弼長政・木村常陸助・梶原某并

家康公より本多中務太輔忠勝・平岩七之
爰を最期とふせき戦ふ、大手搦手敵味方討死手

助親吉後号・鳥居彦右衛門元忠を大将にて
主計頭 負数をしらす、鳥居彦右衛門・平岩七之助は新城

佐倉・土気・東金・聴南・下妻・筑井其外諸城
をせめ破り隠居曲輪へ乗入本城を乗とらんと

をせめよせ 請取、北条十郎氏房氏直舎弟号
采拝を振強に押つめ 責之たり、敵兵も

太田十郎号居城武州岩付の城へ押寄責之、
防戦ふ、其手の者とも討死手負数多あり

大手 八
されとも鳥居彦右衛門采拝を取て堀を乗

浅野霜臺長政・本多中務大輔忠勝押向
越本城の屏際へ旗を押寄猶しきりに

ふ、木村常陸介・梶原八加和気へむかふ、平岩七之助
これをせめけれ八、諸軍はこれに利を得て

親吉・鳥居彦右衛門元忠八新城隠居曲輪へむかつ
押つめ せめ入ほとに、城主伊達与兵衛降

て責之、城中に八宮城・太田・伊達等下知にて
を乞て申八華表の旗を建たる手より此城

を責る事はけしく急にして防にあた　張守用ひされ八、左馬助制止かねて陣屋よりはす、ねか八く八御辛勞分に城を以其將へ　忍ひ出て氏直へ注進申せ八、大に驚きて松田渡し申さんといひて降参するゆへ、鳥居彦　尾張八父子共に城中にて成敗なり、凡天正十右衛門これをうけ取、五月二日に浅野弾正　八庚寅の三月下旬より同七月上旬まで責戦少輔を其城へ引とる也、角て秀吉公八処々　へは城中の軍兵も悉く疲果、みな退屈しての城々戦に討取たる首とも取あつめ小田原　そ見へにける、其時秀吉公無事のあつの城に梟ならへて見せたまへ八、城中いよ　かひ入たまへ八氏政の宣ふ八、我兄弟のもの切弱る処に松田尾張逆心を企て敵兵を城　腹して子孫の命に替り軍兵ともを助け中へ引入て氏政父子を討奉らんとす、次男　むに八不如とて則隨て城を出て氏政五十二・の松田左馬助再三諫言するといへとも少も尾　氏照五十一兄弟ともに切腹也、氏直は兄弟氏親氏邦

左衛門 四人命助り高野山に入給ふ 其後氏直三十歳にして文禄元

年壬辰十一月四日大坂にて病死し給ふ也 此時秀吉公より関東八州を 伊豆相模

武蔵・上野・上総・下総并常陸・下野兩州の内少入ニよつて八州と云也 家康公へ被進そ

れより武州江戸御居城となる也、同十九年

辛卯 家康公五十の御歳、秀吉公は甥

の三好中納言秀次卿を養子として関白に

なし御代を譲り、秀吉公八御隠居にて太閤

と称し奉る、是より秀次卿を当関白と申す

なり、同七月当関白大將軍として奥州

九戸郡発向の時 家康公兵を引会て

たまひ岩戸沢に御旗を立たまふ、奥州

悉く治りて御馬入なり、同年暮に当関

白八聚楽へ移らせたまふ也、文禄元年 壬辰

家康公五十一の御歳三月、太閤高麗へ御

陣立也 家康公も御出陣、肥前国松浦

郡名護屋に同御陣を取給ふ、太閤の御先手

の衆加藤主計頭清政其勢一万余騎、小西撰

津守行長七千余騎、其外の人々朝鮮国へ押

渡り度々の合戦得勝利城々のこらすせめ

おとしうち随へ高麗ことくくおさまりて

同三年^申 九月、太閤御帰陣なれば

家康公在伏見をしたまひて年中に一度

家康公も御帰陣なり、其後太閤伏見の

つゝ八関東へ御下向有之御休息可有、当七歳

城を取立給ふ、同四年^{乙未} 家康公五

の秀頼か十五歳になるまで八天下の後見

十四の御歳^{当殿下叛逆のきこへによつて太閤より高蔵主御使にて仰合れたき子細あり、早々伏見へ入らせたまへとて、たばかり出し、それより}

家康公に預け置申なり、其外の諸大名三

すくに高野山へおくりて、其後生害させたまふなり

年在伏見たるへしと宣ひ置て、太閤行年

慶長元年^{丙申} 家康公五十五の御

六十二、八月十八日薨御せさせ給ふなり、依之

歳、任内大臣にたまふ

家康公在伏見したまひて、天下の後見として

同二年^{丁酉} 家康公五十六の御歳

執権にそならせ給へは、石田を始^(初)て諸臣大名

同三年^{戊戌} 家康公五十七の御歳、太閤御

一味内談して逆意をくハたて 家康公大

病氣大切にならせたまふ時、御遺言として

坂へ渡らせたまふを待うけて、已^(すで)にをしよせ

討奉らんとせし処に藤堂佐渡守高次我
かはせ給ふ、依之家康公其意にまかせ
亭へ招請し奉り無二に御方申す、その内に
給ふゆへに事もなく其年八くれに
伏見にありあふ御譜代衆井伊兵部少輔を先
ける

として取物も取あへすわれも

と馳つき

関東御国替の時御譜代御先手衆

色めきければ襲ひ奉ることあたはずして

の内所替衆之覺

つゝかなく登城ありて伏見へ歸らせ給ふ

上州之内 高崎の城五万石 井伊兵部少輔

なり 同四年己亥 家康公五十八の御

上総之内 小瀧之城五万石 本多中務太輔

歳、於伏見石田棟梁して諸大名打集り

上州之内 館林之城五万石 榊原式部太輔

敵味方顕れて、すてに事出来とする処に

武州之内 岩付之城四万石 平岩七之助

加賀大納言利家卿大坂より馳来り取あつ

下総之内 矢作岩ヶ崎城四万石 鳥居彦右衛門

上州之内
一 城二万石
酒井左衛門尉

総州之内
一 城二万石
大久保七郎右衛門

上州之内
一 白井城二万石
本多豊後守

一 二万石
石川長門守

上総之内
一 佐貫之城二万石
内藤弥次右衛門

一 城二万石
内藤三左衛門

上州之内
一 大胡之城二万石
牧野右馬充

一 一万石
植村出羽守

一 一万石
三宅惣右衛門

慶長五年_{庚子} 家康公五十九の御歳、上杉

景勝会津に在城して不上洛、依之御進発の

ため関東御下向あり 家康公八同廿二日江

戸より押て宇都宮に御陣をとらせ給ふ処に

上方にをいて石田治部少輔三成八此二年の

間 家康公の権威を奪八んと種々次々を 五郎左衛門長重・羽柴下総守瀧川三郎兵衛也・立花左

計てねらふといへとも不叶の処に、兼略此 近将監・安国寺、濃州に岐阜中納言秀信信忠卿長子也

時首尾幸とおもひ立て謀反を起し、太閤 常州に佐竹右京太夫義宣、信州に真田安房守

日来貯へ置せ給ふ処の金銀を取出し秀頼 昌幸等也、其与党大坂表にて勢を揃まつ

公の命として与力の諸大名へ配分する、その 伏見の城へ押寄十重廿重に取巻息をも

其(衍)徒党の人々に八芸州の毛利輝元・嶋 つかせず責之、城中の大將に八鳥居彦右衛門

津兵庫頭忠久修理太夫義久弟也・筑前金吾中納言・備 内藤弥次右衛門・松平主殿助・同五左衛門等

前浮田中納言秀家・尾張前の内府入道・長宗 力戦防之、其頃深尾清三郎といふものに

我部土州元親・大谷刑部少輔吉(継)・長束大蔵 足輕二百人預させ給ひて是をも伏見の城二

太輔・増田右衛門尉長盛・小西撰津守行長・丹羽 のこし置せ給ふ処に、彼清十郎か足輕に三

河以来の御譜代筋目の者一人も不抱して孫市と名乗て真先に進て駈寄れは
新参の寄合足軽なりければ、かの組の足軽鳥居これにあり首取て誉にせよと名
一味して逆心の徒党を潜に松の丸へ引入乗処を雑賀走りかゝりて鎧付首をとる
城中より火をかけ一時に焼立たり、ゆへに八月其外討死したる大将分の首をは大坂へ渡し
朔日巳の刻に城中の軍兵共切て出悉討京橋口に梟たり、それより手分をして
死する、鳥居彦右衛門八生残りたる手廻のもの押出す、其時大津に八京極宰相ありけるを
十四人左右として二の大門を推ひらき敵押柳川侍従宗茂大将にて秀頼馬廻之衆を
入八追出し、込入は追払三度に及て戦へ八手の以責之、十余日持こらへて後城をわたして
もの不残討死する、彦右衛門長刀を杖につき石退く、伊勢口へは長束大蔵太輔正家大将
段に腰をかけ居たる処へ紀州の住人雑賀にて発向し、先津の城をせめて請取

たり、美濃口へ八大手なれ八自身むか八すし
て八かなふましとて三成大将にて諸国の
大名都合十万余大垣へ出張する

家康公小山にて此よし聞せ給ひて大き

に驚き早々古河より御舟に召、夜を日

についで急かせ給ふ、江戸の城へ入らせ給ひて

をのく召寄評定ありて軍の御手分あり、先

上杉・佐竹か押へに八結城の少将秀康・蒲生飛

騾守宇都宮の城主なり秀行さて里見安房守義康房州

の太守を置せ給ふ、江戸中納言秀忠公を八信州へ押

通り真田城を責落し、それより濃州へ出合
可給とて家康公同九月朔日に江戸を打
たゝせたまひて、同八日に尾州清洲へ着せ給ふ也

此時三州池鯉鮒に於て水野和泉守を加賀井弥八か討ける所に同座
にはある堀尾帯刀せき先せき生吉晴、加賀井弥八を打とむる也

家康公、信州秀忠公へ到来、数々串の齒を引か

ことくゆへに秀忠公八真田に三日の御陣取

にて早々引払ひ押上らせ給ふといへとも三成

押寄ければ関原合戦終る也其時の御使の趣は当
敵誅罰の約束なり

三成を討亡すにをいて八自余の小敵八不責に伏すへし、早々
引はらひ濃州表へ押出させたまへと云々

家康公御先勢福嶋左衛門太夫・池田三左衛門

輝政勝入次男稚名
古新と云

・中村式部少輔・浅野紀伊守、加藤

中村式部大輔・浅野紀伊守・加藤左馬助先手の

左馬助八木曾川押越岐阜の城を一時に責崩

大将五頭へ御譜代の士大将井伊兵部少輔・本多

し、一人ものこらす討取て大将中納言秀信を

中務をあひそへて薩摩守忠吉を大將軍

生捕にして門出よしといさみをなし樽井

として討向はせ給へは、三成も数万騎の軍勢

赤坂へ押出す 家康公八同十四日に大垣の

を前後左右に備を立、軍門の旗を して

城きわまで御旗をよせ給ふ処に、敵かた

采拝を取、已に合戦始る処に筑前金吾中納

物見を出したり中村式部少輔一氏より足輕を

言裏切、その上 家康公扇の御馬印を押出

かけゝれは物見武者七八騎討落たり、同十五日

せは敵軍騒立、大谷刑部少輔まつさきに腹かき切

に八関原へ押合す、敵は大軍御方八少勢なれ八

て死す、三成これを見かねて、期するは爰なるそ

家康公も大事と思召、福嶋左衛門太夫・池田三左衛門・

家康公にておはするそ討取奉れ、運八天に

あり尸^(屍)を軍門にさらさん事八武門の誉に

御手八少そあたりける、忠吉一の太刀に

あらずやかゝれやつゝけ、と采拝を振て乗廻

家康公より拝領の大左文字を以てふりあ

し下知すれとも崩立たる大軍なれ八悉敗北

け拝ミうちに松浦かわたかミ付より袈裟か

する、其時井伊兵部少輔直政八備を崩し忠吉

けに切て落させたまふ処へ嶋津九兵衛走り

を御供して敵の真中へ駈入れ八先手の惣勢

つく、忠吉其敵首とれと宣へ八九兵衛はしり

か大声をあけ一度にとつと押かけたり、爰に

寄て首をとる、直政八五反計隔たり戦けるか

嶋津か住人に松浦三郎兵衛と名乗て薩

妻手のかいなを深く手負て引退くなり、忠吉

摩守殿に討てかゝる処を忠吉一太刀切り給へ八

八馬をも乗放し歩立になり給ふ処へ直政家

松浦うけなかし以てひらきて忠吉の弓手の

来に江坂といふもの駈寄わか乗たる馬に忠

かいなを丁ときる、されとも籠手もためしなれば

吉をのせ奉り伊吹山まで御供する、大将

かやうに手を砕かせ給ふゆへ諸卒も悉敵を追

ことし、昨日まで八十万におよぶ大将の三成も

かけく討取なり

此井伊兵部少輔直政と申すもの遠州の住人にて朝臣藤原井太末葉也

今日八かやうになる事よ、しらぬ八人の行末と

井伊万千代とて家康公の御取立当時八薩摩守忠吉の御為に八舅なりたまふ也 徒党の大將三

皆人申さゝやきけり、そのうち三条河原へ引

成をは伊吹山にて生捕しを

出し三成行年三十八をのく青屋か手にかゝり

家康公命に汝か父の冠なれ八とて鳥居久五郎

誅せらる三条の橋つめに梟られたり 其外与党の棟梁等流

にあつけさせたまふ也、同十六日佐保山へ押

罪其国を召放されたり 家康公御父子共

寄させ給ひて三成か兄石田空之助城代にて

にすくに大坂へ御越ありて、今度御忠節

有之を一時に責殺し、それより大津へつかせ

の衆へ御国割あり 其外徒党の内の諸大名御赦免国替の衆多し

たまひて小西行長・安国寺等を搦捕、三成同車

同六年辛丑 家康公六十の御歳、二条堀河の

に乗せ洛中を引渡す、見物の諸人市の

城御譜請あり、同七年壬寅 家康公六十一

の御歳、同八年^{癸卯} 家康公六十二の 同十二年^{丁未} 家康公六十六の御歳、駿府

御歳、秀頼公を叙内大臣給ひ の城を築せたまふ也、同年三月廿八日薩摩

家康公は任征夷將軍給ふなり、其後秀頼公 守忠吉逝去、四月八日に八越前黃門秀康卿
を秀忠公御聲となしたまひて御輿入也 卒し給ふなり

同九年^{甲辰} 家康公六十三の御歳 同十三年^{戊申} 家康公六十七の御歳

同十年^{乙巳} 家康公六十四の御歳 同十四年^{己酉} 家康公六十八の御歳

秀忠公へ征夷將軍をゆつらせたまひて 秀忠公命^二て 尾州名古屋の城御普請あり

家康公八大御所と申奉る 同十五年^{庚戌} 家康公六十九の御歳

同十一年^{丙午} 家康公六十五の御歳、武陽 同十六年^{辛亥} 家康公七十の御歳、上洛

江戸の城御普請あり あり、於京都秀頼と会盟、同四月二日関東

御下向なり

一戦の催し也、片桐市正諫言を奉るといへとも

同十七年^{壬子} 家康公七十一の御歳

取上給八す、故に御進発として同十月十一日

同十八年^{癸丑} 家康公七十二の御歳

家康公駿府を御出馬あり、同廿三日には

同十九年^{甲寅} 家康公七十三の御歳、大坂

秀忠公江戸より押上らせたまへは、坂西五畿

にをいて秀頼諸宰人を抱給ひて十万の軍兵 内・北国・中国・四国・九州・出羽・奥州すへて日本
をあつめ謀反の企ありと聞へける、これに 国の諸大名・諸卒討立ければ

依て 大御所より秀頼公母堂を在江戸し 大御所 將軍数万の大軍を引卒し

給ふへし、さもなくは大坂を去らせ給ひて御 同十一月大坂へをしよせたまひ 家康公住吉

国替あるへしと宣ひ遣されけれ共、秀頼公用 に御陣をかまえたまへは 秀忠公八平野に

ひ給八すして城をかこひ軍器を用意し偏に 御陣を取、それより岡山へ押出させたまふ

家康公も天王寺へをしよせ茶臼山を御陣城 出雲守・酒井左衛門尉・牧野右馬允・松平丹波守・

となし給ふ、諸国の大名・小名数万の大軍東西 京極・堀尾・真田・浅野・上杉・佐竹等也、放野に

南北に馳向ひ大坂の城をとりまきこれを 合戦あり、北八本多美濃守父子・松平武蔵守・

せむ、城中よりも摂州河内の堤をきり放ち 同左衛門督・福嶋・森・有馬押詰 〳 攻寄る

水をたゝへて道路をうたかハしむ、天満・洗場・野 船手には九鬼長門守・向井将監・小浜・千賀

田・福嶋幅か城まで張出す、南方の寄手越 等船をてんほうに着敵船数多乗取たり、四方

前少将・小松少将・井伊・藤堂・生駒・蜂須賀・浅野・ の寄手等責寄竹たはを以仕寄をつけ

鍋嶋・山内・石川等也 此時蜂須賀阿波守かわたか城を乗
とり石川主殿助洗場にてはけし 柵をふり築山をして西楼をあけ大筒・石

きせり
合あり 越前少将忠直・井伊掃部頭直孝八真田か 火矢を放かけゝれ八天地も震動して堀も

取出へ押寄はけしく攻戦たり、東は本多 矢倉も此時に割落るかことく也、城中にも

七手の大将とも長曾我部入道・真田左衛門・大野とみ一時に堀崩し二・三の丸まで埋けれ八
 主馬助・同道犬・森豊後・後藤又兵衛・明石掃堀も築地も平地となる、角(斯)て明る正月三
 部等こゝかしこに馳向て挑戦、そも此城と申八日に八 大御所京都をたゝせたまへ八同
 和朝不双の城郭にて貧究忿怒の兵数万 二九日 將軍伏見を御出馬ありて駿河
 余騎籠り迎も餓死におよ八んよりと身命 武州へ御帰陣也、諸国の大名数万の軍勢
 を捨て戦へは力責にして八可落とも不見処に をのれくか国々へ引帰り万歳を唱ふ処
 大御所 將軍武略を成させたまひあつかひ に、元和元年乙卯 家康公七十四の
 を入給ふゆへ秀頼母堂ねかふ所の幸と和睦さ 御歳二月、秀頼公より四国・中国を御所望
 たまる也、同十二月廿三日より寄手の大勢とり あり 家康公御用ひなければこれに
 かゝり惣構より始として矢倉・石垣・土居し 依てまた軍起る、同四月大野道犬大将

にて和泉の境へ発向して焼はらう、同
たまへは 將軍八同十日に江戸を御出馬
廿九日に八大野主馬助大将にて木村
ありて同廿一日には伏見へ着せたまふなり
長門守を先として一万五千余騎紀州へ赴

此時古田織部正反逆あらハれ軍発して
後東寺にはりつけにかゝる五月五日

泉州岸和田へ働く、其頃紀伊国の守護浅
大御所將軍京都・伏見より御出馬あり
野但馬守数千騎にて馳合かしのへにて合戦
て星野飯森に御陣をとらせ給ふ、御先手
をとけ但馬大に勝利を得大坂勢を十二・三
藤堂和泉守高次・井伊掃部頭直孝平野
町追討、判団右衛門をはしめとして三百余人
口にしむかふ、敵方に八長曾我部入道大将
の首を取、其外大坂勢大和口へも出張し
にて七手の組の諸大将等平乃口へをし
て所々放火して焼働く也 大御所四月
出す、同六日木村長門守先陣にて平野
四日に駿府を御出陣にて同十八日京都へ入せ
口を押出す、八尾の堤を未明に押て若

江の郷へ出張する、其時井伊掃部頭直孝 軍する、高次手の者追かけ 敵数多討
採拜を取て押駈一戦をとけ悉追立 取勝利を得る也、大和に八本多美濃守父
押崩し其手の大将木村長門守を八直孝 子・水野日向守・松平下総守・伊達正宗、大将
家人安藤長三郎と云者討取、二之手に八 八越後少将忠輝道明寺口へをし寄れ八
長曾我部押出す所を藤堂和泉守高次 敵後藤又兵衛・大野主馬・真田左衛門大将と
おし向ひ八尾の堤にをいてせり合あり、此 して押出す、御方には水野日向守・松平
時高次家人藤堂新七・同仁右衛門を始て 下総両手を以おし崩し悉討取 此時後藤又兵衛
八討死とも云々
数多討死する、井伊掃部頭直孝八討散 同七日に八 大御所・將軍星田飯森を
たる手勢をあつめ横合に馳合せんため旗 早天におし御旗を寄せ給ふ、敵方に八
を推向すゝむ処に敵陣崩れ立て敗 真田左衛門・森豊前・大野主馬・同道犬・明石

掃部頭大将五人茶臼山へ取上りて陣を
 采拝をとらせ給ひて馳廻り御下知あれ八
 とる、御方御先に八越前少将忠直・加賀少
 御方競かゝつて押崩しことく討取たり
 将利常・本多出雲守・酒井左衛門尉・榊原遠
 真田左衛門佐をは越前少将の手にて西尾
 江守・本多豊後守大将にて押向て足輕の
 仁左衛門と云者討取なり、御方に八本多出雲
 かけ合あり、其時越前少将忠直後叙宰相
法名(皁)白
 守・小笠原兵部太夫秀政・同美濃守忠脩并
 采拝をとりて乗出し給へは、舎弟伊予守
 御旗本にて安藤治右衛門・同彦四郎・石川
 忠昌・出羽守直政を始め其手の軍勢を
 内記等討死する 家康公八御父子三人
 しかゝれ八諸軍つゝいて駈合せ敵味方へ
尾張
紀伊数万騎にて扣へさせたまふ也、口々の寄手
 入乱討つうたれつ切先よりも火燃を出し
 いまたせめ入さるさきに大阪城より出火
 黒煙を立てもみ合たり 大將軍ミつから
 して御殿にもえつき一宇ものこらす

焼はらふ塩硝蔵に火移り天地も同時に 害して御供する也、その日

是かために崩るかとおひたし、討のこされ 家康公八京都へ帰入せ給へ八秀忠公八九日に

たる大坂勢是に驚き城中へ馳入らんとし 大坂を押払ひ伏見へ帰らせ給ふなり、去程に

けれども内より木戸を閉て入され八散々に 今度敵方にをいて七人の大将の内長曾

落行を、あそこゝにて追掛逐詰生捕 我部入道をは八幡にてからめ来るを二条の

首を取秀頼公八焼残たる矢倉に引籠り 駒寄に戒さらす、大野道犬を八大仏にて

たまふ所へ井伊掃部頭直孝上使として行 からめ取堺を渡し其後三条河原へ引出

向ふ、秀頼行歳廿四、母堂并大蔵卿・大野修 し青屋か手にかけて首を刎橋の元にか

理亮介錯申矢倉に火をかけ焼立て大野 けられたり、其外大野主馬・明石掃部其のち

修理・濟蔵人・速見甲斐守等其外少々自 秀頼公の御子とて八歳になる童子をさ

かし出し三条河原にて被討と云々、八月日 御薬の一包をも用ひさせ不給処に、此時勅
大御所京都を御出馬ありて駿府へ御帰 使下旬ありて正一位太政大臣に御昇進
陣なり、同十月に八御鷹野として江府へ あり 此時御祝儀の御敬加にえらひ出たる衆四人八井伊
掃部頭と酒井下総守・細川越中守忠興と鳥井讚岐守
御下向ありて極月に至りて還御なり 忠頼等
なり 大相国と申奉る

同二年 丙辰 正月廿一日 大御所田中へ 將軍公へ御遺言に八、余死してのち久能の山へ
御鷹野に御出あり、俄に御違例の御 移して来年日光山へ大権現と崇むへし
心持とて還御し給へは 將軍を始奉り 当家末世の守護神と成へしと宜ひ置せ
御公達御薬をすゝめさせたまふといへとも 給ひて行歳七十五、四月十七日午ノ刻に薨せ
大御所の命に曰、人間の迷ひ眼前なり させたまうなり

余已に七旬にあまり定業かきりあり、とて 御辞世あり

常に行道と八かねて知らずから去年のさくらに風
はしめたてまつり諸国の大名・小名・高家
を待つゝ 嬉しやと二度(ふたたび)さめて一眠り浮世の夢
の衆各々供奉して庭下に列をなす、日光
はあかつきの空 さきにゆき跡に残ると同じ
山において八本地薬師大菩薩と顕れさせ
ことつれてゆかぬを別とそいふ 御遺言に
給ひて王法佛法の守護神とならせた
まかせたまひて久能山へ土葬にし奉り
まふそありがたけれ

東照大権現と顕れさせ給へ八榊原内記は 安国殿大相国一品徳蓮社崇譽道和大居士
御家伝の者なれ八神主たるへしと是も御
遺言にて神職に補せらるゝ也、同三年丁巳

四月十七日に八日光山へ観請し奉らせ給ひて
將軍御参宮ありけれ八、宰相少将一門を

